



## 伊勢神宮奉納百首の諸相

著者	福留 瑞美
雑誌名	國文學
巻	100
ページ	125-136
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/10176">http://hdl.handle.net/10112/10176</a>

## 伊勢神宮奉納百首の諸相

福留瑞美

はじめに

伊勢神宮は、皇大神宮（内宮、祭神天照大神）と豊受大神宮（外宮、祭神豊受大御神）、および両宮の摂末社（神宮百二十五社）などの総称である。古くから皇祖神として崇敬を集め、第十代崇神天皇（第九十六代後醍醐天皇の間には皇族の未婚女性が齋宮として祭祀に奉仕した。そのうち齋宮群行は第九十代亀山朝までである）。

そして、平安末期以降には伊勢神宮に数々の歌人たちが百首歌を奉納している。文治二年（一一八六）には西行の勸進により寂蓮・隆信・家隆・定家など十二人ほどが「二見浦百首」（伊勢百首とも）を詠んでいる。その二年後、慈円も同題で「御裳濯百首」を詠み、その端書に「依二円位聖人勸進」文治四年秋比

詠<sup>レ</sup>之、為<sup>二</sup>大神宮法楽<sup>一</sup>也云云。只為<sup>二</sup>結縁<sup>一</sup>也」と記している。したがって、百首歌が神への法楽となり神との結縁にもなるという意識のもとで詠まれていることが分かる。その後、文治六年（一一九〇）に俊成が「伊勢大神宮百首」、建仁元年（一二二〇）に後鳥羽院が「内宮百首」「外宮百首」、承久二年（一二三二）に慈円の勸進により定家・家隆などが「四季題百首」、文応元年（一二六〇）に為家が「太神宮百首」を奉納している。

そこで本稿では、伊勢神宮への奉納百首のうち百首揃っているものを対象として、奉納先である伊勢神宮をどの程度意識して和歌に詠み入れているかという百首歌の構成について比較検討したいと思う。本稿で取り上げたものは、

①西行勸進「二見浦百首（伊勢百首）」のうち「拾遺愚草」所収「二見浦百首」一一八六年詠、『拾玉集』所収「御裳

濯百首<sup>二見</sup>」一七八八年詠（春20・夏10・秋20・冬10・恋10・  
述懐5・無常5・雑20首からなる部立百首）

②『俊成五社百首』所収の「伊勢大神宮百首」（堀河題による百題百首。一一九〇年詠。勅撰集完成の謝意か）

③『後鳥羽院御集』所収の「内宮百首」「外宮百首」（春20・夏15・秋20・冬15・祝5・神祇5・雑20首からなる部立百首。一一〇一年三月詠。勅撰集完成の祈願か）

④慈円勸進「四季題百首」のうち『拾遺愚草員外』所収「四季百首」一三二〇年秋詠、『壬二集』所収「慈鎮大僧正池・鳥・田・松・杜・草・花・祝・山家・旅・恋・述懐・釈教」の25題を四季題で詠む結題百首

⑤『為家七社百首』所収の「太神宮百首」（堀河題による百題百首。一二六〇年詠。勅撰集完成の祈願か）

である。なお、本稿で取り上げる引用本文は『新編国歌大観』DVD-ROM版に拠っており、各和歌下の算用数字は新編国歌大観番号である。また、引用本文については便宜上漢字を当てた送り仮名を省いたり「」を付したり、表記を改めている。

## 一、西行勸進「二見浦百首」

和歌において歌枕（地名）は、古歌などのイメージを集約した表現と言える。したがって百首歌において歌枕をたどることで、百首歌全体の世界観や構成意図が見て取ることが可能であろう。

まずは定家「二見浦百首」と慈円「御裳濯川百首」の歌枕（地名）を拾い上げると、「表1」に示した結果となる。定家の場合では百首中十五首に歌枕が詠まれているが、そのうち神宮を想定して詠まれたものは一首のみである。それは「雑廿首」中の「神祇五首」、

①清かなる月日の影にあたりても天照る神を頼むばかりぞ  
（拾遺愚草181）

②中中にさしても言はじ三笠山思ふ心は神も知るらん（同182）  
③聞くごとくに頼む心ぞ澄みまさる賀茂の社の御手洗の声  
（同183）

④うきことも慰む道のしるべとや世を住吉と天下りけん  
（同184）

⑤いかならん三輪の山もと年ふりて過行く秋の暮れ方の空  
（同185）

とあるうちの一首目①であり、「天照る神」つまり内宮の祭神

(天照大神)に「頼むばかりぞ」と願掛けする内容となっている。これを見ても分かるように、あくまでも和歌①は「雑廿首」中の「神祇五首」として詠み入れられた神社(神宮、春日社・賀茂社・住吉・三輪)のうち最初に詠まれたものであり、特別に奉納先を意識して詠み入れられたというものではない。した

〔表1〕二見浦百首(定家・慈円)の歌枕

	定家の百首	慈円の百首
春 20	吉野(山)〔天和〕×3・葛城山〔天和〕 和	吉野山〔天和〕×5・室八鳥〔下野〕・朝原〔天和〕・竜田川〔天和〕・姨捨山〔信濃〕・越路・田子浦〔駿河〕・井手川〔山城〕・富士〔甲斐〕
夏 10	大井川〔山城〕	其神山〔山城〕・奈良思丘〔天和〕・井手〔山城国〕
秋 20	清見濁(駿河)・三室山〔天和〕	唐土&蘆屋沖〔摂津〕・三熊野浦〔紀伊〕・深草里〔山城〕・片岡〔天和〕・粟津野&瀬田長橋〔近江〕・須磨〔摂津〕
冬 10	朝原〔天和〕	竜田山〔天和〕・猪名〔摂津〕・勝間田池〔天和〕
恋 10		難波堀江〔摂津〕・猿沢池〔天和〕
恋 10		鳥部山〔山城〕
雑 20	天照神〔伊勢〕・三笠山〔山城〕・賀茂社〔山城〕・住吉〔摂津〕・三輪山〔天和〕・立田山〔天和〕・宇治川〔山城〕	都〔山城〕・唐土・葛城〔天和〕・伊勢
合計	15首(うち伊勢関連1首)	33首(うち伊勢関連1首)

「」は国名。■は伊勢関連の歌枕。

がって、定家の「二見浦百首」は歌枕を見る限りでは、吉野や葛城山・三室山など大和国の歌枕が多く、神宮への奉納歌としての特徴が見られない。

それに対して慈円の場合は、百首中三十三首に歌枕が詠まれ、定家よりも多くの歌枕が詠み入れられているが、神宮ゆかりの歌枕が詠まれたものは百首末尾の和歌のみである。正確を期すると、『拾玉集』所収の「御裳濯百首」は全百一首からなっており、百首目に「うき身をば神にぞ祈る神風や伊勢の浜浪根にくたすな」(拾玉集600)、百一首目に「人なみに我が言の葉を散らすかな五十鈴が原の秋の夕暮」(同601)とある。前者は神への祈願が詠まれており、後者は願い事を書き散らしたことへの反省となっていて総括的内容となっている。おそらく後者は、当該の百首歌を詠み終えて西行に送る際に添付された和歌であろうかと思われる。このように慈円の「御裳濯百首」は、歌枕が摂津国から下野国まで広い範囲に及んでおり、そのほとんどが神宮とは関わりのないものであるが、末尾の和歌が神宮に関する表現(神への祈願)で締めくくられており、中途で詠んでいる定家の場合と比べて、神宮への奉納を意識した百首構成を有していると言える。

このことについては、上野一孝氏が「定家『二見浦百首』の

構想」(『論集 中世の文学 韻文篇』明治書院・一九九四年)において、「慈円の態度が西行の考えをより発展させたものだ」とすれば、それに対して定家の意識は、大神宮にはなく勸進元西行に向いていた」と指摘している。

## 二、慈円勸進「四季題百首」

のちに定家は承久二年(一二二〇)秋に慈円勸進の「四季題百首」を詠んでいる。この頃の定家は、同年二月十三日内裏歌会における「野外柳」題の定家詠が後鳥羽院の勘気に触れて以来、籠居していた。さて、その定家の「四季題百首」の冒頭「四季神祇」題では、

①新玉の年を祈るとひく駒のあとも久しき二月の空

(員外507祈年祭)

②水無月の月影白き小忌衣うたふさざ浪よるぞ涼しき

(員外508神今食)

③御幣の立つや五十鈴の川浪に山の紅葉も幣や手向くる

(員外509例幣)

④かざしこし桜も藤も昔にて御手洗川を思ひこそやれ

(員外510臨時祭)

と詠まれており、和歌①「祈年祭」は二月四日に神宮に勸使が幣物を奉る儀式、②「神今食」は六月十一日〜十二日にかけて天照大神を奏請して贄を供えて天皇も食する儀式、③「例幣」は神嘗祭において例幣使がたてられ九月十七日に御幣を神宮に奉納する儀式の様子であり、④「臨時祭」は十一月下の酉日に行われる賀茂の臨時祭である。したがって、定家の「四季題百首」冒頭の神祇には神宮と関わりのある宮廷行事が設定されており、朝廷および皇族と神宮の結びつきを強調した表現となっている。

それに対して、家隆の「四季題百首」の「四季神祇」では、

⑤散りかかる曇もあらじ神風や五十鈴の河の花の鏡は

(壬二集 114)

⑥をとめ子がゆふ神山の玉蔓けふは葵をかけやそふらむ

(同 114)

⑦唐錦たれ手向けけん大和なる三笠の紅葉春日野の萩

(同 114)

⑧明けぬ夜の山の日吉の朝日影さすがにかくる雪の白ゆふ

(同 114)

とあり、和歌⑤は内宮の五十鈴川に花が映る様子、⑥は賀茂祭での舞姫の様子、⑦は春日社に紅葉や萩を御幣として手向けるかのようにするもの、⑧日吉社における雪が降る早朝の様子

を描いている。つまり各神社における四季の情景を主眼として詠んだものとなっており、定家とは異にする。

歌枕については、次の「表2」に示したとおり、定家が百首中十八首、家隆が三十五首詠んでいる。そのうち伊勢関連の表現（「四季神祇」一題以外）には、

⑨さならでも秋の思ひは大淀の松をつらしと浦風ぞ吹く

（員外54海）

⑩過ぎがてにしばしやすらへ帰る雁山田の原の朧月夜を

「表2」四季題百首（定家・家隆）の歌枕・歌語

「」は国名。■は伊勢関連の歌枕

	定家の百首	家隆の百首
五十鈴川〔伊勢・御手洗川〕山城・玉川〔山城〕・都×2・九重〔山城〕・飛火野〔天和〕・住吉〔摂津〕・蘆屋里〔摂津〕・都×2・入野〔山城〕・一重山〔山城か〕・撰津・大淀〔伊勢〕・白河〔山城〕・大鷲坂〔山城〕・朝日山〔山城〕・飛火天和・化井川〔山城〕・隅田川〔武蔵〕・衣手杜〔山城か〕・阿波手杜〔尾張か〕・常盤杜〔山城〕・春日野〔天和〕・小倉山〔山城〕	五十鈴川〔伊勢〕・神山〔山城〕・春日野〔天和〕・日吉〔近江〕・鴉の海〔近江〕・三島江撰津・都×2・入野〔山城〕・一重山〔山城か〕・朝日山〔山城〕・飛火天和・化井川〔山城〕・武蔵野・淡路島・因可池〔天和〕・飛鳥川〔天和〕・衣川〔陸奥〕・染川〔筑紫〕・山田原〔伊勢〕・山田原〔伊勢〕・浮田杜〔山城〕・野中杜〔播磨〕・信太杜〔和泉〕・衣手杜〔山城か〕・安治麻野〔越前〕・三角柏・荻烧原・さやの中山〔遠江〕・三芳野〔天和〕・和歌浦〔紀伊〕・鷲山〔天竺〕	
18首（うち伊勢関連2首）	35首（うち伊勢関連3首）	

（王二1194鳥）

⑪万世もなほ長月の浦にあふ三角柏に神酒奉る（王二1220祝）  
 とあり、定家の和歌⑨「大淀」は多気郡明和町にある斎宮御祓の場のことで神宮と関連する場所であるが、当該和歌は『伊勢物語』伊勢斎宮関係章段の「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな」（七十二段）を踏まえた表現となっており、伊勢神宮への奉納という点においてはふさわしくないとともに思える。一方、家隆の和歌⑩は豊受大神宮（外宮）の鎮座地である山田原を通り過ぎることができないほど美しい朧月夜の様子、同⑪は神酒を奉る祝の歌になっており、奉納先を意識した表現になっている。

以上見てきたように、定家の「四季題百首」は先の「二見浦百首」とは違い、冒頭に神宮関連の宮廷行事を詠み入れており、神宮への奉納百首であることを示しているように思われる。しかし、院勅を蒙り籠居していた定家は「四季題百首」に非常に多くの沈淪訴嘆の和歌を詠み入れており、その意識は神宮よりもその儀式を行う宮廷に向けられている。したがって慈円「御裳濯川百首」や家隆「四季題百首」と比べて、定家の奉納百首（二見浦百首・四季題百首）は奉納先を意図的に詠み入れるという意識が希薄と言える。

### 三、堀河題による大神宮百首

右

西行は「二見浦百首」を勧進したのと前後して、俊成に自歌合の加判を依頼している。伊勢内宮に奉納された『御裳濯河歌合』（三十六番七十二首。文治三年成立か）が、それである。その後、病床にあつた西行は一時少し回復したものの、文治六年（一一九〇）二月十六日に没している（長秋詠藻<sup>61</sup>など）。

『俊成五社百首』の成立は、序文に「文治五年より思ひたち：五社百首とて詠みそへて、文治六年建久元年の春ぞ清書して奉り侍るべし」とあり、そのうちの大神宮百首は伊勢神官権禰宜荒木田氏良によつて建久元年七月廿日に奉納された（『長秋草』夢記）。したがつて、『俊成五社百首』は西行の死と相前後して成立したということになる。そして、この『俊成五社百首』所収「伊勢大神宮百首」には、西行の和歌（御裳濯河歌合）を意識していたと思われる和歌が存在する。

①名を思へ桜の宮に祈り見ん花を散らさぬ神風もがな

（俊成10桜）

とある「桜の宮」については、『御裳濯河歌合』二番に、

左持

神風に心やすくぞまかせつる桜の宮の花の盛りを

さやかなる鶯の高嶺の雲より影やはらぐる月読の杜

左の桜の宮、右の月読の杜、勝負なし、猶持とす『御裳濯河歌合』以前には「桜の宮」が詠まれた和歌は見当たらず、いずれの和歌も「神風」と組み合わせられて詠まれていることから、俊成は西行の和歌を意識していたと考えられる。また、

②人知れず百枝の松を頼むかな藤の末葉もあはれかけなん

（俊成82松）

とある「百枝の松」については、『長秋詠藻』下（594・595）に、

歌合といふことする人々の勝負定むる事をこなたかなたよりふれつかはすことのみあるを、とかうかへさひ申しながら、いなびがたき時はおほえぬことどもを書きつけ侍るもよしなくて、近き年より此方、長くちかひたりとてせぬ事になりしを、円位聖といふは昔より申しかはす物なりしを、わが詠み集めたる歌どもを三十六番につがひて伊勢大神宮に奉らんずるなりとて、これなほ勝ち負け記してとしひて申ししかば、おろおろ書付けてつかはしける歌合の端に、聖人の書きつけたりける歌  
藤波を御裳濯川にせき入れて百枝の松にかけよとぞ思ふ  
返しに、歌合の奥に書きつけける

藤浪も御裳濯河の末なればしづ枝もかけよ松の百枝に

藤原もとは大中臣なりし心にや

とある。詞書の傍線部は『御裳濯河歌合』のことを指しており、その歌合の端に西行が記していた和歌に「百枝の松」が詠まれていた。当該の和歌以前に用例が見出せないのが、俊成の和歌②「人知れず百枝の松を頼むかな」とは、『御裳濯河歌合』をめぐっての西行との贈答歌を意識した表現と思われる。換言すれば、当時の俊成の意識には『御裳濯河歌合』を媒介に西行と神宮が結びつけられ、「伊勢百首」に関連の「桜の宮」「百枝の松」が詠まれたと考えられるのである。

そして、この『俊成五社百首』から多大な影響を受けて成立したのが、『為家七社百首』である。詳細については前回「為家七社百首」の祈りの系譜（『国文学』98号・二〇一四年三月）において述べたのでそちらに譲るが、文応元年（一二六〇）から祖父俊成の行跡をたどるように為家は堀河題による奉納百首を詠出し、歌題や形式や奉納順など様々な面で『俊成五社百首』を踏襲する作品である。

さて、『俊成五社百首』所収「伊勢大神宮百首」と、『為家七社百首』所収「太神宮百首」の歌枕を分類すると、次の「表3」の結果となる。神宮に関連する歌枕（地名）を詠み入れた和歌

「表3」俊成詠と為家詠の歌枕・歌語（所在別）

合計	その他	山城大和	神話・神代	伊勢風辺	依代・神木	斎宮・群行	巫女・神主	神宮			
								神威	神域	外宮	
51首（うち伊勢関連36首） 〔海路〕	唐土〔梅〕・忍岡〔早麩〕・小笠原〔春末〕・信夫山〔藤奥〕・宇津山〔藤恋〕・末の松山〔恨〕・白河関〔関〕・松浦	野山〔残雪〕・竜田〔紅葉〕	歌訪の渡り〔丞〕・香具山〔神楽〕・高千穂山、神代〔菊〕	伊勢浜〔粟蘆〕・二見渦〔雁〕、和歌浦〔鶴〕・三穂岩屋〔若〕・三熊野〔單雪〕	玉串葉〔露〕・三角柏〔初恋〕・百枝松〔松〕	斎宮〔籬虫〕・竹宮〔竹〕・鈴鹿川〔橋〕	たをやめ〔柳〕・宮人〔單・歌冬・萩〕	神風〔虫〕・天照の光〔初冬〕・天の戸〔祝〕	桜宮〔桜〕・月読神〔月〕	豊宮柱〔遠櫻〕	俊成の百首
61首（うち伊勢関連54首）	桐原〔駒連〕・八橋〔藤恋〕・富士〔思〕・東野〔野〕	都〔旅〕・片岡朝原〔早麩〕・板田橋	天香具山〔更衣〕・天原開けし岩戸〔雪〕・あらかねの神〔山〕、神代〔三月・神楽松〕	美豆野〔春駒〕・野路〔刈萱〕・逢坂山〔初遠恋〕・鈴鹿山〔扇雁・郭公・薄〕・鹿山〔蘆〕・二志浦〔若菜〕・雲出川〔鹿〕・麻生浦〔五月雨〕・星合浜〔七〕	玉串葉〔残雪〕・露〔霜〕・榊葉〔梅〕	斎の宮〔杜若〕	天の戸〔菴〕・天照の〔葵・祝〕	桜宮〔桜〕・月読杜月〔神〕・早苗〔神の荒垣〔卯花〕	山田原〔若菜〕・春雨	五十鈴川〔立春〕・六月敷〔鹿水〕・逢坂山〔立春〕・五十鈴川〔六月〕・恋河〔迷雁〕・神路山〔蘆〕・天つ社〔葵〕・神山〔残雪〕・立秋〕・神垣山〔菊〕	為家の百首



は、俊成に百首中三十六例、為家に五十四例も存在しており、巻頭や巻末または一部のみにしか詠み入れていないような「二見浦百首」「四季題百首」とは異なり、俊成や為家の場合は神宮及びその周辺の情景を描くことを意図していたことを示している。特徴的なものとして、まず俊成は和歌では珍しい地名を詠み入れている点である。

③雲出川くもづせき入れてまける苗代は秋の空こそかねて見えけれ  
(俊成15苗代)

④七夕や天の川より通ひけん誰か名づけし星台の浜

(俊成37七夕)

⑤神風や宮野の原の刈萱をかられてのみは過ぎんものかは  
(俊成41刈萱)

⑥神風や竹の籬の松虫は千代に千歳の秋や重ねん(俊成52虫)

⑦竹の宮籬に植えて千世までと祝ひそめけん此君ぞこれ

(俊成83竹)

和歌③「雲出川」は奈良県境あたりから伊勢湾へと流れる川、④「星合の浜」は雲出川右岸の低地、⑤「宮野原」は雲出川支流の中村川中流域にあたる。和歌⑥「神風や竹の籬」は「竹の宮」を想定していると思われる、その⑦「竹の宮」は齋宮の座所(三重県多気郡明和町竹川)のことで、『八雲御抄』三・異名部に「齋

宮の、みや(群行以前御在所)。たけのみや(伊勢御在所)。いつきの宮。いはみや」とあり、いずれも齋宮を賞美する和歌である。一方、為家にも齋宮を詠んだ和歌はあるが、

⑧思ひやる齋宮は跡ふりて花咲き残る杜若かな

(為家113杜若)

とあるように、当時十八年間ほど齋宮群行が中断されていたため、「跡ふりて」と思ひやる表現になっている。また、為家の和歌の特徴としては、

⑨朝霞たちいでて見れば春の野に葦摘みにと急ぐ宮人

(為家106葦)

⑩宮人の衣の色といはねどもひとつにまがふ山吹の花

(為家127款冬)

⑪宮人の花摺り衣急がなん露に咲きそふ安濃の萩原

(為家260萩)

⑫世をめぐみ民はぐくむうるひとて山田の原は春雨ぞ降る

(為家71春雨)

⑬苗代の山田の民の苦しさをかへすがへすも君は育め

(為家99苗代)

⑭いにしへを思ふにつけて藤の花心にかけて恵みをぞまつ

(為家120藤)

⑮いかばかり神のためにと早苗とる民の力をあはれと看見る  
(為家176早苗)

⑯思ひいづる昔をいかがこひざらん七代にすぐす老いの命は  
(為家666懐旧)

とある和歌⑨～⑪「宮人」つまり神官の姿を詠んでいる点である。また為家の場合は皇祖神への奉納ということが強く意識されておられ、和歌⑫～⑬は「君・臣・民」を意識した表現が詠まれ、和歌⑭「七代」は為家が仕えてきた歴代の天皇（順徳・龜山朝）を指す。そして、両者の共通する特徴としては、神名や神話を積極的に取り入れている点にある。

⑰葵草日影になびく心あれば天つ社もあはれかくらむ

(為家23葵)

⑱月読の神にもいかで祈りみん秋の空には雲なくもがな

(為家50月)

⑲時雨るとも神無月とは誰か言ひし天照る光限りあらじを

(俊成56初冬)

⑳香具山や神の枝にきてかけその神遊び思ひこそやれ

(俊成66神楽)

㉑高千穂の穂触峰ぞあふがるる天のをすめのはじめと思へ

よ  
(俊成86山)

㉒かけまくもかしこき豊の宮柱なほき心は空に知るらん

(俊成99述懐)

㉓君が代は千世ともささじ天の戸や出づる月日の限りなれば  
(俊成100祝)

㉔ことのはに光をそへよ久かたの天照る秋の月読の杜

(為家344月)

㉕天の原開けし岩戸の面影もあなおもしろの雪のあしたや

(為家414雪)

㉖あらかねの神のはじめに迹垂れし宮居の山はときはかきはに

(為家596山)

㉗日の御影天照る光さしそへて万世まもれ我が君のため

(為家694祝)

まず、伊勢内宮の天照大神（日神）は和歌⑰⑱⑲⑳⑳では太陽と重ね合わされ、和歌㉕では天岩戸から出現した際に皆が「あはれ、あなおもしろ、あなたなのし、あなさやけ、おけ」（古語拾遺）と喜んだ神話に拠る表現を使用する。和歌㉑「高千穂の穂触峰」は天照大神の命を受けて孫の瓊瓊杵尊が高天原から降臨した地で、「天のをすめ」（天鈿女）は天岩戸の際には滑稽な踊りで天照大神をひきつけ、天孫降臨の際には瓊瓊杵尊に付き従った五神（五伴緒）のうちの女神である。「をすめ」という表記

はおそらく「天鈿女命（古語、天乃於須女…）」（古語拾遺）とある古語に拠るものと思われる。和歌⑳「豊の宮柱」は外宮の豊受大神のことである。和歌㉑「あらかねの神のはじめ」は、『古今集』仮名序における和歌の起源を記した部分「この歌、天地の開け始まりける時より出でにけり。しかあれども、世に伝はることは久方の天にしては下照姫に始まり、あらかねの地にしては素戔鳴尊よりぞ起こりける」に拠る。

以上のように、堀河題によって詠まれた俊成・為家の「伊勢百首」は、神宮および周辺の情景、都から伊勢までの道のり（伊勢路）、神話（天岩戸・天孫降臨）、皇祖神など、あらゆる方向から伊勢神宮への奉納和歌であることを表現している。これらは、「二見浦百首」「四季題百首」とは異なり、個人詠であることや、百首歌の構成意識の違いからくるものと思われるのである。

#### 四、後鳥羽院「内宮・外宮百首」

『後鳥羽院御集』所収の「内宮百首」「外宮百首」の両百首から歌枕（地名）を拾い上げると、次の「表4」の通りの結果となる。表が示すように、両百首の冒頭と「神祇五首」では神宮ゆかりの歌枕が詠まれており、奉納を意図した構成となっている。

〔表4〕後鳥羽院の内宮百首・外宮百首の歌枕

	春 20	夏 15	秋 20	冬 15	祝 5	神祇 5	雑 20	合計
	野	鳩の海〔近江〕・鳥羽田〔山城〕	鳥羽田〔山城〕・水無瀬川〔摂津〕・入野〔山城〕・宮城野〔陸奥〕・明石浦〔播磨〕・虫〔備前〕	武蔵野・深草〔山城〕・立田山〔天和〕・初瀬山〔天和〕・伏見〔山城〕・吹上浦〔紀伊〕・更級里〔信濃〕・宇治川〔山城〕		神路山〔内宮〕・伊勢浜×2・神風×4・御裳濯〔内宮〕	都〔山城〕×2・吹上〔紀伊〕・東路・清見潟〔駿河〕・須磨浦〔摂津〕・住の江〔摂津〕・雄鳥〔陸前〕・神	46首（うち伊勢関連7首）
	野	難波〔摂津〕・三島江〔摂津〕・鳥羽田〔山城〕・清滝川〔山城〕・石上〔天和〕	常盤山〔山城〕・入野〔山城〕・深草〔山城〕・御垣原〔天和〕・大江山生野〔丹波〕・都・高円尾上宮〔天和〕・菅原伏見〔山城〕	生田〔摂津〕・三笠山〔天和〕・吉野〔天和〕・清滝川〔天和〕・天川&交野〔河内〕・甲斐山〔甲斐〕・比良山〔近江〕・因幡山〔因幡〕	逢坂山〔近江〕・和歌浦〔紀伊〕・塩山差出磯〔甲斐〕	和・神	神仏、都×3・明石〔播磨〕×2・初瀬山〔天和〕・須磨浦〔摂津〕・袖師浦〔出雲〕・宇津山〔駿河〕×2・和歌浦〔紀伊〕	51首（うち伊勢関連8首）
	内宮百首	外宮百首						

〔 〕は国名。■は伊勢関連の歌枕

ることが分かる。その両百首の冒頭歌は、

①朝日さす御裳濯川の春の空のどかなるべき世の景色かな

(201内宮)

②宮川の春立つ空の初風にうちいづる浪の花や散るらむ

(301外宮)

であり、御裳濯川（内宮境内を流れる五十鈴川）と宮川（外宮の御祓川）における立春の情景が詠まれている。そして「神祇五首」では、

③尽きもせず都の空に吹きかよへ神路の山の千世の春風

(276内宮)

④神風や伊勢の浜辺の曙に霞吹きよる浦の初風

(277内宮)

⑤神風や空なる雲を払ふらむ一夜も月のくもる間ぞなき

(278内宮)

⑥秋の空のどけき浪に月さえて神風寒し伊勢の浜萩

(279内宮)

⑦御裳濯や頼みをかくる神風の心に吹かぬ時の間ぞなき

(280内宮)

⑧春の色をけふ宮川の杉の葉に吹きくる風も神さびにけり

(376外宮)

⑨宮川やいつも緑の杉の葉に今ひとしほの春風ぞ吹く

(377外宮)

⑩久方の空ゆく風に雲きえて月影寒し宮川の秋

(378外宮)

⑪鈴鹿山伊勢の浦和の秋の浪やどれる月をよする春風

(379外宮)

⑫よよへても神やみ川に絶えぬ浪絶えて忘るる間なく時なし

(380外宮)

とあり、神へ祈願したり神の威力（神風）を讃えたりしている。このように両百首とも、冒頭歌と「神祇五首」では奉納先に関係する歌枕を詠み入れるという構成を持っている。そして「神祇」題の詠法については、「四季題百首」のような奉納先以外の神社も詠み入れる方法とは異なり、全五首とも神宮を想定した和歌になっており、いっそう奉納先が意識された表現になっている。また、

⑬思ふべしくだりはてたる世なれども神のちかひぞ猶も朽ちせぬ

(内宮300雑)

⑭昔には神も仏もかはらぬをくだれる世とは人の心ぞ

(外宮381雑)

⑮都人頼めぬ宿のまきの戸に何のならひの庭の松風

(外宮382雑)

⑯かりにても思ひおこせよ都人同じ心に月は見ずとも

(外宮399雑)

⑰和歌浦の蘆間の浪にたちかへり昔に似たるたづの声かな

(外宮400雑)

⑱四方の海の浪に釣りする海士人もをさまれる代の風はうれしや

(内宮275祝)

⑲野も山もをさまれる世の春風は花散る頃もいとひやはする

(外宮318春)

⑳関守も関の戸うとく成りにけりをさまれる世に逢坂の山

(外宮371祝)

とある和歌⑬～⑰は「雑二十首」で詠まれたもので、定家の「四季題百首」ほどではないが、述懐的な内容を詠む傾向にある。和歌⑰は新古今集を意識したもの、和歌⑱～⑳では「君子の徳は風なり」(論語・顔淵)を踏まえて、治天の君としての治世を詠んだものと思われる。

### おわりに

以上示したとおり、同じ神宮への奉納百首であっても、奉納先を描写するという意識には大きな差が見られた。定家の場合には希薄であり、対して俊成や為家の場合は描写することに主眼があった。この意識は百首歌の構成意図の違いを表している

思われる。

このように奉納先をほとんど意識していない定家「二見浦百首」や、巻末歌にのみ詠んだ慈円「御裳濯川百首」という作品はあるが、それ以外の作品ではおおよそ巻頭において神宮関連の和歌を詠み入れるという点は共通している。また歌枕の選択においては、奉納先とは無関係な地名を積極的に詠み入れるものが主流ではあるが、俊成や為家の「伊勢百首」の場合は奉納先をあらゆる角度から表現しようと試みられていた。「神祇五首」題の扱いにおいては、神宮を含む主要な神社を詠み入れたもの(定家「二見浦百首」、家隆「四季題百首」)や、宮廷行事という視点から詠み入れたもの(定家「四季題百首」)もあれば、全てに奉納先を詠み入れたもの(後鳥羽院「内宮・外宮百首」)もあり、歌人の意識の違いが見られる。

一概に奉納百首と言ってもその性格は実に様々であり、奉納先をどの程度意識して詠み入れているのかという点においても歌人の意識に大きな差があり、巻頭歌や神祇歌など百首歌の構成にも反映されているのである。

(ふくどめ たまみ／本学東西学術研究所非常勤研究員)